

Factors Conducive to Catch-Up Growth in Postoperative Jejunoileal Atresia Patients as Prognostic Markers of Outcome

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2016-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 澁谷, 聡一 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001876

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1733 号

Factors Conducive to Catch-Up Growth in Postoperative Jejunoileal Atresia Patients as Prognostic Markers of Outcome

(小腸閉鎖患者の予後指標としての術後体重増加に関連する因子の研究)

澁谷 聡一 (しぶや そういち)

博士 (医学)

論文内容の要旨

先天性小腸閉鎖症(以下、本症)は、術後十分な体重増加(catch up growth: CUG)が得られる症例と得られない症例がある。今回、本症に対する術後体重増加について CUG の有無に関連する因子を検討した。

当院で本症に対して手術が行われた患者を後方視的に検証した。日本人の性別年齢別の平均体重と比較し、平均体重との差を標準偏差で除した WSD スコア (weight standard deviation score) として評価した。術後の WSD スコアの変化に基づいて 3 群に分類した。WSD スコアが術後 12 ヶ月時までに \pm SD 以上となった症例を M+群、術後 12 ヶ月時には \pm SD 以下であったが、その後に CUG を認め術後 24 ヶ月時までに \pm SD 以上となった症例を M-CUG+群、CUG が認められず術後 24 ヶ月時にも \pm SD 以下であった症例を M-CUG-群とした。それぞれの群に関して在胎週数、出生体重、閉鎖部位、残存小腸長、経静脈栄養期間について比較を行った。残存小腸の長さは①実際の長さ(residual length)に加え、②在胎週数から期待される全小腸の長さ(predicted length)との比を RP 比[① / ②]として評価した。

対象患者は 42 例でそれぞれ M+群 13 例、M-CUG+群 11 例、M-CUG-群 18 例であった。

在胎週数、出生体重、閉鎖部位、経静脈栄養期間に 3 群間で有意差は認めなかった。各群の間で実際の残存小腸長に有意差を認めなかったが、RP 比は M+群と M-CUG+群は M-CUG-群と比して高く、有意差を認めた ($84.7 \pm 15.4\%$ vs. $83.8 \pm 17.7\%$ vs. $69.2 \pm 18.1\%$)。

RP 比が高い症例(80%以上)は術後の良好な CUG が期待できると考えられた。一方、RP 比が低い(70%以下)症例は CUG が得られない可能性があり、術後の積極的な栄養管理の対象となると考えられる。本症の術後患者に対しては、実際の残存小腸長を評価するのみでは術後に CUG が期待できるかどうかを予測するには不十分であり、RP 比を評価するほうがより有用である。本論文は本症術後患者における予後予測の指標として RP 比を用いることを提唱した初めての論文である。